

# 音楽のよさや美しさを味わって聴く力を高める中学校音楽科学習指導の在り方（二年次） — 生徒がコミュニケーションする活動を充実させた指導事例の作成を通して —

【研究者】 教科教育部 指導主事 濱本 飛鳥

【研究指導者】 広島女学院大学人間生活学部 准教授 森保 尚美

【研究協力員】

北広島町立千代田中学校 教諭 基木 雅貴

## 研究の要約

本研究は、音楽のよさや美しさを味わって聴く力を高める中学校音楽科学習指導の在り方について、生徒がコミュニケーションする活動を充実させた指導事例を作成し、実践を通して検証したものである。

一年次は、文献研究から、本研究における「音楽のよさや美しさを味わって聴く力」について整理し、生徒がコミュニケーションする活動を通して楽曲を聴き深めていく鑑賞の指導事例を作成した。

二年次は、鑑賞領域で育む能力について再定義するとともに、指導事例に基づく検証授業を実施し、授業の分析を通して、本指導事例の有効性を検証した。その結果、本指導事例におけるコミュニケーションする活動の工夫については、生徒同士の共感、共有が実現した点や、感じ取ったことを言葉や文章で表現する意識を向上させた点に効果があり、概ね有効であることが分かった。また、検証の結果を基に、コミュニケーションする活動を充実させた鑑賞の指導について、中学校で効果的に実施する際のポイントをまとめることができた。

キーワード：知識 共感 共有

## I 問題の所在

本県では「広島版『学びの変革』アクション・プラン」の取組が進み、生徒の主体的な学びを促す授業実践が数多く見られるようになった。しかし、中学校音楽科の鑑賞領域では、臼井学（平成27年）が過去に見られた授業として「音楽を聴いて思い思いに感想を書いたり、作曲者や曲名、形式等を覚えたりすることを主目的とした授業が散見された。」<sup>1)</sup>と述べているように、依然として「知識ベースの学び」にとどまっている現状がある。また、大熊信彦（平成25年）は、「漠然とした感想を述べることにとどまってしまう」「聴いた音楽について、生徒が自分の意見などを述べることは難しい」「楽曲の特徴や音楽の背景となる知識を知ること、主体的・創造的に音楽を聴くことが、結び付いていかない」などが、鑑賞の学習における問題点として指摘されていることを示している<sup>(1)</sup>。このような指摘の背景には、指導者が、鑑賞の学習の趣旨や鑑賞で育む能力について、十分に理解していない現状があると考えられる。

中学校学習指導要領（平成20年、以下「指導要領」）音楽の第2学年及び第3学年の内容「B鑑賞」指導事項（1）アには、「音楽を形づくっている要素や構

造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。」<sup>2)</sup>と示されている。この中の「根拠をもって批評する」ことについて、中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年、以下「解説」とする。）では、「音楽のよさや美しさなどについて、音楽を形づくっている要素や構造などの客観的な理由をあげながら言葉で表すことである。」<sup>3)</sup>と述べられている。また、「解説」には「音楽の鑑賞は、音楽を聴いてそれを享受するという意味から受動的な行為ととらえられることがある。しかし、音楽科における鑑賞の学習は、音楽によって喚起されたイメージや感情などを、自分なりに言葉で言い表したり書き表したりする主体的・能動的な活動によって成立する。」<sup>4)</sup>と示されており、鑑賞の学習においては、根拠をもって批評する等の思いを言葉で表す場面を設定し、生徒の主体的な学びを促すことで学習の質的な充実を図っていく必要があると考える。

このような現状を踏まえ、本研究では鑑賞の学習で育む能力について整理し、生徒のコミュニケーションする活動を充実させることで、音楽のよさや美しさを味わって聴く力を高める指導事例を作成す

る。また、指導事例の検証と考察を通して、生徒が関わり合うことで教科学習の本質に迫る指導の在り方を明らかにし、本県の音楽科教育のさらなる充実を図りたいと考える。

## II 一年次の研究の概要

一年次の研究では、本研究における「音楽のよさや美しさを味わって聴く力」を、「対象となる音楽が、自分にとってどのような価値があるのかを、音楽を形づくっている要素や構造などの客観的な理由をあげながら、鑑賞の学習で得た知識と関わらせて言葉で表し他者に伝える力」と整理し、この力を高めるために、生徒がコミュニケーションする活動を通して楽曲を聴き深めていく鑑賞領域の指導事例を作成した。また、音楽科におけるコミュニケーションについては、図1のように整理した。

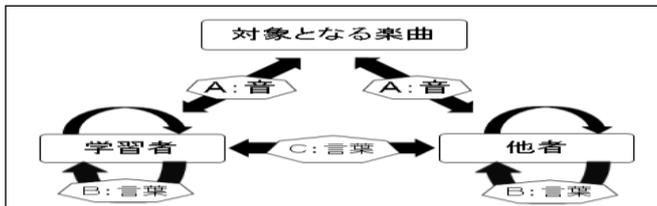


図1 音楽科におけるコミュニケーションの構造

図中Aは、学習者が楽曲を聴き、知覚・感受する場面に当たる「音によるコミュニケーション」、図中BはAの知覚・感受を支えとして、学習者自身が楽曲を解釈したり価値を見いだしたりする「言葉によるコミュニケーション」、図中Cは学習者と他者における「言葉によるコミュニケーション」である。図中Cの意義は、自分とは異なる気付きや価値観に触れ、新たに音楽を捉えなおすことで音楽の味わいを一層深めることだと捉える。その際、個人の思考を深めるための一人学びの時間と、他者と考えを伝え合う時間とを、相互に往復させることで、最終的には生徒一人一人が楽曲の価値付けを行うことができるようにする。また、本研究では、「感受した主観的で多様な感じ方を互いに認め合うこと」を共感、「コミュニケーションする活動を通して音楽的な特徴などの客観的なことを把握し合うこと」を共有と整理し、学級内で共感と共有が実現することをコミュニケーションする活動が充実した姿とする。

## III 研究の方法と計画

### 1 二年次の研究について

二年次の研究は、一年次に作成した指導事例に基づいた研究協力員による研究授業を行う。指導事例の有効性の検証を行い、検証の結果を基に、コミュニケーションする活動を充実させた鑑賞の指導について、中学校で効果的に実施する際のポイントを整理し、音楽のよさや美しさを味わって聴く力を高める指導の在り方について明らかにする。

## 2 研究計画

期間	内容
4月	○研究計画書の作成
5月～2月	○指導事例の再検討
6月～1月	○研究関係者会議の実施
11月	○研究協力校での授業実施
11月～2月	○指導事例の検証
1月～2月	○研究のまとめ及び研究報告書の作成

## IV 研究の基本的な考え方

### 1 知識の定義の再検討

一年次の研究では、音楽のよさや美しさを味わうために、鑑賞領域で育む能力を図2のように整理した。

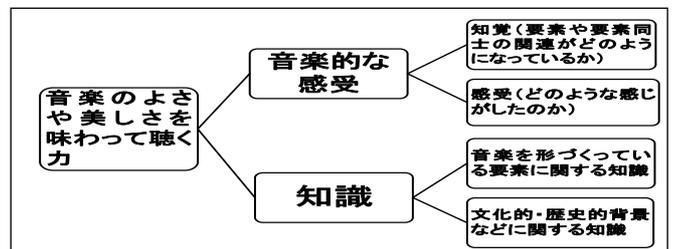


図2 音楽のよさや美しさを味わうために鑑賞で育む能力

図2の「音楽を形づくっている要素に関する知識」の捉え方について、一年次は、名称や意味などを理解する学習は、知覚・感受する学習と一体的に行うものであり、実感を伴った知識として獲得させることが必要であると述べつつも、鑑賞で育む能力を「音楽的な感受」と「知識」に分けて整理した。しかし、芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（平成28年、以下「WG審議の取りまとめ」とする。）で示された「音楽科、芸術科（音楽）の目標の在り方」を踏まえると、「音楽的な感受」と「知識」を分けて整理することは適切ではないと考えた。

「WG審議の取りまとめ」では、「芸術系教科・科目における『知識』については、一人一人が感性などを働かせて様々なことを感じ取りながら考え、自

分なりに理解し、表現したり鑑賞したりする喜びにつながっていくものであることが重要である。」<sup>5)</sup>と示され、知識が個別の感じ方や考え方等に応じ、生きて働く概念として習得されることや、新たな学習過程を経験することを通じて更新されていくことが重要であると示されている。その上で「知識」に関しては、〔共通事項〕との関連を図り、音楽を形づくっている要素などの働きについて実感を伴いながら理解し、表現や鑑賞などに生かすことができるようにすることが重要であると述べられている。また、新たな用語や記号に関する知識、楽曲の背景に関する知識など、音楽に対する感性が働いていない状態で得ることができる知識についても、これらの知識を生きて働くものとするためには、音楽活動を通して実感を伴って理解することが大切であると述べられている<sup>2)</sup>。また、津田正之（平成28年）は、音楽科における教育課程の改善について、音楽科における知識の考え方として、知識の種類を次の④～⑩のように示し、⑩の知識については④⑤⑥を関連付けたり組み合わせたりして理解したものであると位置付けている<sup>3)</sup>。

- ④ 音楽活動を伴わなくても得られる知識（自分の内から生み出すことのできない知識）
- ⑤ 主として聴き取り／知覚を伴うことによって得られる知識（音楽を聴いて、気付きや発見によって得られる知識）
- ⑥ 主として感じ取り／感受を伴うことによって得られる知識（音楽を聴いて生じたイメージや感情の動きがあることによって得られる知識）
- ⑩ 音楽を形づくっている要素の聴き取り／知覚・感じ取り／感受を支えとした音楽活動を通して得られる知識（音楽の学習を通して、自分で構築する知識）

これらのことから、音楽科における知識は、音楽的な感受を基に感性を働かせた上で習得されるべきものであり、新たな学習過程を通じて再構築されなければならないものであるといえる。この捉え方は稿者が一年次に整理していた方向性と一致する。

よって二年次の研究では、音楽のよさや美しさを味わって聴く学習過程を、津田の示す④～⑩の知識を基に図3のようにイメージし、研究を進める。

## 2 音楽のよさや美しさを味わって聴く力について

前述した「知識」の定義の再検討を踏まえ、一年次の定義を見直し、本研究の「音楽のよさや美しさを味わって聴く力」を、「対象となる音楽が、自分に

とってどのような価値があるのかを、知覚・感受を支えとした学習活動を通して再構築した知識を生かして言葉で表し他者に伝える力」と再定義することとした。

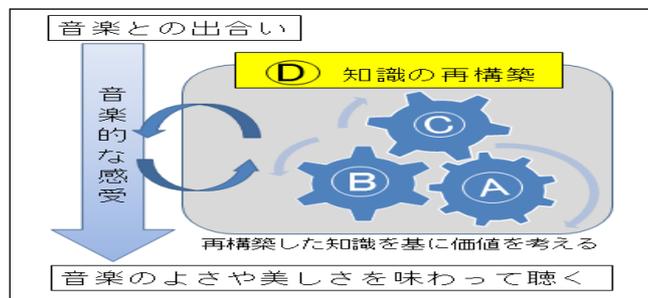


図3 学習過程のイメージ

## V 研究の仮説及び検証の視点と方法

### 1 研究の仮説

中学校音楽科の鑑賞領域の指導において、生徒がコミュニケーションする活動を設定した授業を実施すると、生徒は感じたことや考えたことを他者と伝え合うことで自らの考えを深め、音楽のよさや美しさを味わって聴く力を高めることができるであろう。

### 2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表1に示す。検証に用いるワークシートは、北広島町立千代田中学校の第2学年（3学級81人）を対象に、11月に実施した授業で用いたワークシートとする。また、アンケートは7月と12月に同一の質問項目で実施した事前・事後アンケートとする。

表1 検証の視点と方法

検証の視点	方法
1 感じたことや考えたことを他者と伝え合うことで自らの考えを深めることができたか。	・事前アンケート ・事後アンケート ・ワークシート
2 音楽のよさや美しさを味わって聴く力が高まったか。	・授業観察 ・インタビュー

## VI 検証授業について

- 対象 中学校第2学年（3学級81人）
- 実施期間 平成28年11月～12月
- 題材名 音楽の構造を理解してオーケストラの響きを味わおう
- 教材名 「交響曲第5番 ハ短調作品67」〔全楽章〕（ベートーヴェン作曲）

○ 中学校学習指導要領との関連

「B鑑賞」〔第2学年及び第3学年〕

ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。

イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解して、鑑賞すること。

〔共通事項〕

本題材で扱う主な音楽を形づくっている要素とその具体

音色	オーケストラの楽器の音色
リズム	動機のリズム
旋律	主題の旋律、ハ短調とハ長調
形式	各楽章の形式（ソナタ形式等）
構成	主題の繰り返しや変化、各楽章に現れる動機の繰り返しや変化、各楽章の曲想の違い

○ 目標

音楽の構造やオーケストラの響きに関心をもち、音色、リズム、旋律、形式、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、要素や構造と曲想との関わりを理解して、解釈したり価値を考えたりし、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。

○ ワークシート

○ 題材計画

次	教材	主な学習活動
第一次	第1楽章	○第1楽章を知覚・感受する。 ○作曲家や楽曲の背景を知る。 ○動機のリズムに着目して提示部を聴き、第1主題の特徴を捉える。
		○第1主題と第2主題の違いを捉える。 ○ソナタ形式について知る。 ○第1楽章を通して聴き、短い紹介文にまとめる。
第二次	第2・3・4楽章	○全楽章（ダイジェスト版）を聴く。 ○交響曲について知る。 ○オーケストラの演奏形態について知る。 ○担当する楽章の特徴を捉える。
		○担当する楽章のよさを整理し、紹介文にまとめる。 ○担当する楽章のよさを紹介し合い、楽曲を聴く。
第三次	全楽章	○他グループの紹介内容を参考に、全楽章を鑑賞する。 ○全楽章を通して聴き、個人で批評文を完成させる。

○ 評価規準

音楽への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
①「交響曲第5番ハ短調」の音楽を形づくっている音色、リズム、旋律、形式、構成や構造と曲想との関わりに関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	①「交響曲第5番ハ短調」の音楽を形づくっている音色、リズム、旋律、形式、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じている。 ②「交響曲第5番ハ短調」の音楽を形づくっている音色、リズム、旋律、形式、構成や構造と曲想との関わりを理解して、解釈したり価値を考えたりし、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。

Music 音楽科 第2学年 学習プリント No.1  
「交響曲第5番 ハ短調」  
( )組( )番  
氏名( )

1 音楽を聴いて感じた気持ちや雰囲気と、音楽の特徴との関係について記入しましょう。

気持ちや雰囲気	動機(線、矢印等)	要素	音楽の特徴

※他の人の発表を聞いて付け加える時は、色を覚えて記入しましょう。

2 動機のリズムを「ことば」で表現し、リズム譜を書いてみましょう。

3 第1主題と比べて、第2主題はどんな感じでしたか。また、どんな特徴がありましたか。

4 これまでの学習を振り返りながら、第1楽章について「気に入ったところ」をまとめてみましょう。

友達からの「いいね！」

Music 音楽科 第2学年 学習プリント No.2  
「交響曲第5番 ハ短調」  
( )組( )番  
氏名( )

■担当する楽章について、おすすめポイントをまとめてみましょう。 担当は【 】楽章

<学習の流れ>  
① 担当する楽章を通して聴く。(第1楽章と比べて聴こう。)  
② 色の異なる2種類の付箋に個人で感受したことを記入する。(右下に氏名を書こう。)

(赤) 音色 (青) 動機のリズム  
(黄) 旋律 (紫) 形式

③ 記入した付箋をグループごとに持ち寄り、感受したことを伝え合う。  
※ 出された意見については、随時音で特徴を確かめる。  
④ 感受したこと、音楽の特徴を聞かせて、担当する楽章のよさを整理する。(横道紙)  
⑤ 担当する楽章のよさを「第1楽章との聴き比べおすすめポイントベスト3」として、まとめる。

1 自分のグループでまとめた「おすすめポイントベスト3」を書きましょう。

ベスト1	
ベスト2	
ベスト3	

2 他のグループの紹介を聴いて、面白いと感じたことをメモしておきましょう。

第2楽章	第3楽章	第4楽章

Music 音楽科 第2学年 学習プリント No.3  
「交響曲第5番 ハ短調」  
( )組( )番  
氏名( )

■「交響曲第5番ハ短調」の音楽について、ア・イの順に批評文にまとめてみましょう。

ア 第1楽章から第4楽章までを聴いて、印象したことや感じ取ったこと、その理由、イ 全楽章を聴いて、あなたが一番気に入ったところや他者に紹介したいこととその理由。  
【資料】アの理由には、「音色」「リズム」「動機」「形式」「構成」「旋律」「変化」「主題」のうち、二つ以上の要素を使いましょう。

ア

イ

私が一番気に入ったところは、

友達「いいね！」をメモしておきましょう。

○ コミュニケーションする活動を充実させた指導事例（全5時間）

◆ 第1楽章の音色、リズム、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取る。（2時間）

◎コミュニケーションする活動の工夫（ワークシートNo.1）

個人で感受した内容を記入した後、ペアで交流する場面を複数回設定し、新たに楽曲を捉え直させる。他者の意見は色を変えて記入させることで、音楽的な特徴の共有と他者の感じ方への共感を促す。

★目指す共感・共有の姿（例）

- ・第1楽章を通して聴いてどんな気持ちになったか交流している。また、なぜそのように感じたのか、再度楽曲を聴き取って交流し、互いに気付いた音楽的な特徴と結び付けて楽曲を捉え直している。
- ・楽曲を聴きながら、身体の動き等で動機のリズムを確かめ合っている。
- ・二つの主題を比較聴取する場面で、感じたことと聴き取った楽曲の特徴を伝え合っている。
- ・第1楽章の「気に入ったところ」について紹介し合い、よいと感じたことを互いにコメントし合っている。

◆ 担当する楽章の音楽的な特徴を、第1楽章と比較して捉える。（2時間）

◎コミュニケーションする活動の工夫（ワークシートNo.2）

担当する楽章を決め、グループごとに楽曲の特徴を捉えさせる。グループは小編成（4人程度）とし、他者の考えを聞く機会と自分の考えを伝える機会を確保する。また、音と言葉によるコミュニケーションを往復させやすくするため、書く活動は付箋へのメモ程度にとどめる。※知覚・感受を促すため、聴く視点を「曲想」と「動機の現れ方」の2点に絞り、色の違う付箋に個人で記入させる。グループでは、付箋を用いた交流を基に、担当する楽章のよさを「おすすめポイントベスト3」としてまとめさせ、全体場で発表させる。

★目指す共感・共有の姿（例）

- ・付箋に記入したことを基に、自分の考えを分かりやすく伝えたり、他者の発言を注意深く聴いたりしている。また、交流した内容を踏まえて再度楽曲を聴き、多様な視点で曲を捉え直している。
- ・グループで出された意見の共通点や相違点を見付けることで、楽曲の特徴や楽曲が与える印象について整理してまとめている。

◆ 楽曲のよさや美しさについて批評文を書き、味わって聴く。（1時間）

◎コミュニケーションする活動の工夫（ワークシートNo.3）

個人で仕上げた批評文をグループ内で紹介し合う場を設け、良いと感じたことを互いにコメントさせる。

★目指す共感・共有の姿（例）

- ・自分とは異なる気付きや価値観に触れ、よさを認め合っている。また、他者の新たな価値に触れた上で楽曲を聴き直し、より深く音楽のよさや美しさを味わっている。

共感・共有し合うことで自らの考えを深め、音楽のよさや美しさを味わって聴く。

## Ⅶ 授業実践の分析と考察

### 1 感じたことや考えたことを他者と伝え合うことで自らの考えを深めることができたか。

#### (1) 事前・事後アンケートより

図4・図5は、コミュニケーションする活動に係る質問項目についての、生徒アンケートの結果である。

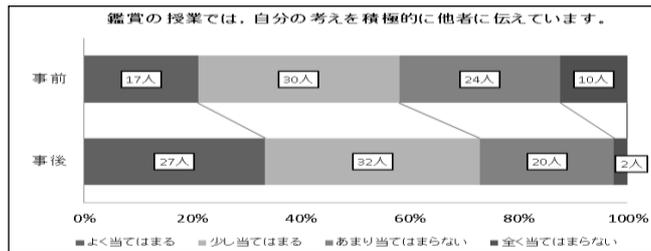


図4 生徒アンケートの結果

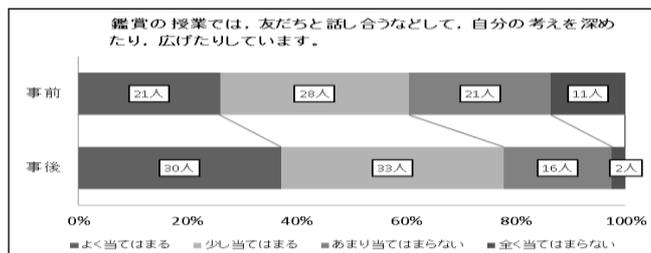


図5 生徒アンケートの結果

生徒の変容を見ると、「鑑賞の授業では、自分の考えを積極的に他者に伝えていきます。」に対して肯定的な回答をした生徒は、事前58.0%、事後72.8%と15ポイント近い上昇が見られた。また、「鑑賞の授業では、友だちと話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりしています。」に対して肯定的な回答をした生徒は、事前60.4%、事後77.7%であり、17ポイントの上昇が見られた。このことから、本題材の授業を通して、70%以上の生徒が、自分の考えを積極的に発信している実感をもっていることや、他者と関わることで自分の考えの深まりや広がりを感じていることが分かる。

また、図6は「音楽の授業で鑑賞をするとき、その音楽の特徴や音楽から感じ取ったことを言葉や文章などで表すことは好きです。」に対する意識調査の結果である。肯定的な回答をした生徒は、事前41.9%、事後62.9%と21ポイントの上昇が見られた。とりわけ、事前調査で「全く当てはまらない」と回答した生徒が26人であったのに対し、事後調査では4人に減少していることに着目したい。

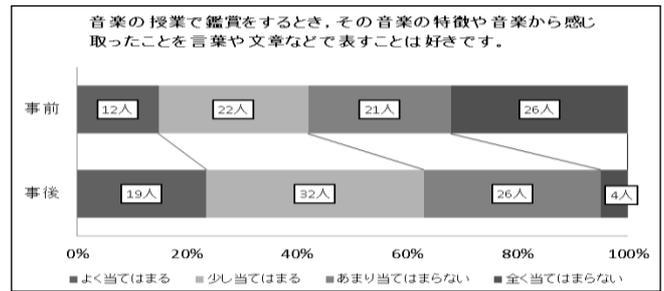


図6 生徒アンケートの結果

これは、題材におけるコミュニケーションする活動の工夫が、生徒の意欲喚起につながったと考える。本指導事例は、楽曲を聴いて感じ取ったことを話し合ったり、文章に書き表したりする生徒の意識を向上させた点において有効であったといえる。

なお、いずれの事後調査においても「全く当てはまらない」と回答した生徒が数人いた。今後は、その要因を詳しく解明し、実態把握に努めるとともに、個に応じた指導の充実を図っていく必要がある。

#### (2) 個の変容より

図4・図5の生徒アンケートにおいて、事前アンケートでは「全く当てはまらない」と回答していた生徒のうち、事後アンケートでは肯定的な回答に変容した生徒を対象に、ワークシートや観察から分析を行う。

##### ア 生徒Aについて

生徒Aは、第二次で担当する楽章のよさをグループでまとめていく際、楽曲を聴いて個人の思いを付箋に記入する段階では、第3楽章の曲想について「最初は音が弱くて、後からだんだん強くなっていく」、動機については「音が高い・弱い」としか書いていなかった。これらは、知覚のみの記述であり、感受したことについては触れられていない。その後、グループ協議を経て、生徒Aが最終的にワークシートに記入した文章は「第3楽章は小さい音からだんだん大きくなり、とても勇ましい部分だなあと感じました。」と知覚と感受を関わらせた表現に変容した。感受に当たる「勇ましい」という言葉は、グループ活動の中で、他者が発した言葉であり、生徒Aはその感じ方に共感し、自らの文章に盛り込んだものと考えられる。また、生徒A自身が最初に知覚していた強弱の変化についても、グループ活動の中で音楽的な特徴として、他者と共有することができたと考ええる。

##### イ 生徒Bについて

生徒Bは、第三次の批評文で「この曲は失敗と成功のくり返しのような感じがした」と感受したこと

を記述していた。これに対し、他者から「表現の仕方がすごい」「曲の変化に気付いてベートーベン（の人生）と重ね合わせて聴いているのがいいね」とのコメントを受けた。このような他者の共感を得たことが、生徒の意識を向上させたと考えられる。

### (3) 共感・共有の実現状況について

#### ア 授業観察から

稿者が、第4時の授業を参観した際の、グループ活動の様子を次に示す。

(付箋を出し合う場面)

生徒C：1班のおすすめは何にする？  
生徒D：「動機のリズムがいい」かな。  
生徒C：え？動機のリズムは（型が）決まってるじゃん。動機が聴き取りやすいつてこと？  
生徒D：違う。何回も連続して出てくるじゃん。  
(机でリズムをたたいて伝える)  
生徒E：あー、何回も連続していいね。  
生徒C：音が高いよね。テテテーン↑って。  
生徒F：（それは）同じ音が繰り返されているんじゃない？

このグループでは、はじめは生徒Dが、担当する第3楽章について「動機のリズムがいい」と具体性に欠ける発言をしていたが、グループ活動を通して、動機が連続していることを良いと感じた生徒Dの思いを引き出し、音楽的な特徴を共有していた。また、その後も動機についての発言が続き、第3楽章は、第1楽章よりも動機を奏でる楽器の音色が高いことや、同じ音の連続で動機が演奏されていることを、付箋の記述を基に共有している姿が見られた。

(おすすめベスト3をまとめる場面)

生徒G：フルートの単独の所があったよね。  
班員：あったっけ？  
生徒G：なかったっけ？  
生徒H：（ロズさんで）タタタターン・タタタターンの所？  
生徒G：そうそうその部分。クラリネット？ファゴットかな？  
生徒H：ファゴットは違うでしょ？  
(教科書を開いて皆で確かめる)  
生徒H：クラリネットじゃなくてホルンじゃん。  
生徒G：あ、じゃあ僕のおすすめは「ホルンの動機の音がきれい」です。

このグループでは、生徒Gが、おすすめしたい部分があるものの、楽器の音色までは詳しく聴き取ることができていなかったことに対して、グループのメンバーが旋律を口ずさむことで対象となる旋律を共有し、更には楽器名を確認する姿が見られた。他者との関わりの中で、曖昧だった知識が、明確になった場面であったといえる。

以上のようなグループ活動の姿から、本指導事例においては、共感・共有が実現したと考える。

#### イ 研究協力員へのインタビューより

授業におけるコミュニケーションの様子や、共感・共有の実現状況を把握するため、研究協力員に電話による15分程度のインタビューを行った。聴き取った内容を次に示す。

- 感受したことを、ワークシートではなく付箋に記入させたことが効果的であった。一人2枚以上という数を設定したこともあり、生徒が必然性を感じて付箋に書き込む姿が見られ、未記入の生徒はいなかった。全員が個人の意見をもつことにつながった。
- グループごとに楽曲の特徴を聴き取らせる際、ラジカセの周りでは、生徒は随時言葉を交わし、気付いたことを述べ合っていた。常に関わり合う姿が見られた。
- 最初は聴き取れなかった動機や、個人では気付かなかった動機が聴き取れた時、どの生徒も大変嬉しそうであった。グループ活動では、音楽を流しながら、動機のリズムを教え合ったり、聴こえた動機に合わせて体を動かしたりする姿（口ずさむ・指揮をする等）が見られた。
- 楽曲をじっくり聴くための環境設定が必要である。同じ教室内で、複数のグループが活動したため、全体の場で聴いた時に初めて特徴に気付く生徒も多かった。

(○は成果、●は課題とする。)

このような生徒の関わり合う姿が見られたことから、本指導事例におけるコミュニケーションする活動の工夫は、概ね有効であったと考える。

## 2 音楽のよさや美しさを味わって聴く力が高まったか。

### (1) 第一次における紹介文の分析

第一次の終末に、第1楽章の「気に入ったところ」を文章にまとめて書くという課題を設定した。評価に当たっては、第一次の中心となる知識を表2のように整理し、表3に示した判断基準で評価した。結果を表4に示す。

表4のとおり、9割以上の生徒が、知覚したことと感受したことを関連付けて、再構築した知識を生かして紹介文を書くことができていた。生徒が記述した「気に入ったところ」を分類すると「動機の表れ方」又は「第1主題と第2主題の音楽的な特徴」に関わる内容がほとんどであった。これらは、ワークシートNo.1を用いて、第一次の授業で中心的に扱った内容であり、生徒は、学習活動で理解した知識を踏まえて記述しているといえる。また、作曲者ベートーヴェンや楽曲の背景についての知識と関わらせて「気に入ったところ」を捉えた生徒も見られた。図7に、評価Ⅲと判断した紹介文を示す。

表2 第一次の中心となる知識

	分類	具体例
㉠	音楽活動を伴わなくても得られる知識	動機のリズム、二つの主題、ソナタ形式、作曲者について
㉡	音楽を形づくっている要素の聴き取り（知覚）による知識	動機のリズムの表れ方、第1主題と第2主題の音楽的な特徴、ソナタ形式の構造など
㉢	音楽を形づくっている要素の感じ取り（感受）による知識	第1主題と第2主題の曲想の違い、動機の繰り返しが生み出す雰囲気、ソナタ形式による曲想の変化など

表3 紹介文の判断基準

評価	
III	自分の気に入ったところを具体的に記述している。かつその理由として、学習活動で知覚・感受したことを関連付け、要素を適切に用いて述べるなど、質的な高まりをもってまとめている。
II	自分の気に入ったところについて記述している。かつその理由として、学習活動で知覚・感受したことを関連付けて述べている。
I	自分の気に入ったところについて記述しているが、知覚・感受が不十分である。又は、知覚・感受は見られるが気に入ったところについての記述がない。

表4 評価の内訳（全80人）

評価	III	II	I
人数	24人	51人	5人

「動機の表れ方」「主題の音楽的な特徴」に着目した紹介文

この曲はリズムと強弱が特徴的な曲です。この曲の動機は曲中に何度もくり返されていて、曲に緊張感を与えています。第1主題と第2主題で、雰囲気が変わるところがおすすです。ひとつの曲で第1主題の怖い場面と第2主題のなめらかな落ち着いた場面を聴くことができます。また、展開部では、提示部とは違った音色の動機が聴けるのでここもおすすです。動機が繰り返されるところに注目してお聴きください。

「主題の音楽的な特徴」に着目した紹介文

この曲は、第1主題では音色が暗くて強弱も強いので、圧迫感が感じられます。しかし、第2主題では打って変わって音色が明るくなり速度も遅くゆるやかになります。この曲は、暗い→明るいの繰り返して、それを音色、強弱、速度で表しています。自分的には気持ちが変化しているみたいでおもしろいです。

「作曲者」と関わらせた紹介文

気に入ったところは第1主題から第2主題へ移った時、デデデデーという暗い音色からパパパーンという明るい音色に変わるところです。速度も大きく変化します。明るくなったと思ったら暗くなって、まるで耳がきこえなくなりましたベートーヴェンの運命を表しているようだと感じました。リズムや音色の変化また何度も出てくる動機にも注目して聴いてみてください。

(下線は稿者 点線を㉠、波線を㉡、二重線を㉢の知識とする。)

図7 評価IIIと判断した紹介文

このように、生徒は知覚・感受したことと授業で新たに得た知識を関連付けたり組み合わせたりすることで知識を再構築し、自分の気に入ったところを表現することができた。よって、第一次では、音楽のよさや美しさを味わって聴く力を高めることができたと考える。なお、評価Iと判断した生徒5人の中に、気に入ったところについての記述のない生徒は見られなかった。評価Iと判断した理由には、客観的な記述が十分ではないという実態が挙げられる。改善のためには、日々の学習活動の中で、感じ取ったことと音楽的な特徴を結び付けて言葉で表す指導を丁寧に行っていく必要があると考える。

(2) 第三次における批評文の分析

第三次では、題材全体（全5時間）の学習を踏まえて、次のように批評文ア・イを書くという課題を設定した。

批評文ア：第1楽章から第4楽章までを聴いて、想像したことや感じ取ったことと、その理由。【条件】批評文アの理由には、「音色」「リズム」「旋律」「形式」「構成」「動機」「変化」「主題」のうち、二つ以上の言葉を使いましょう。  
批評文イ：全楽章を聴いて、あなたが一番気に入ったところや他者に紹介したいこととその理由。

批評文アは、知覚と感受の実現の状況について、批評文イは、自分にとっての価値に迫る状況について評価するための課題とする。なお、評価に当たっては、表5、表6で示した判断基準で評価し、それぞれの段階別の人数をクロス集計したものを、表7に示す。

表7より、批評文ア・イともに評価II以上の生徒は70人であり、86.4%の生徒が音楽のよさや美しさを味わって聴くことができたと考える。また、批評文ア・イのいずれかが評価Iだった生徒は数人いるが、どちらの批評文も評価Iと判断した生徒は一人であった。この一人は、批評文ア・イともに、感受したことの記述しか見られなかった。しかし、この生徒は第5時に「先生にいろいろ教えてもらってから聴いてみると、おもしろさが伝わります。」と感想を書いていることから、批評文では知覚と感受を伴った記述は見られなかったものの、音楽の特徴を捉えて楽曲を聴き取ることは、一定程度できていたと考えられる。今後は、聴き取ったことを言語で表現させる指導を丁寧に行っていく必要があると考える。

表5 批評文アの判断基準

評価	
Ⅲ	想像したことや感じ取ったことを具体的に記述している。かつその理由として条件から二つ以上の要素を挙げ、用語を適切に用いてまとめている。
Ⅱ	想像したことや感じ取ったことを記述している。かつその理由として条件から二つ以上の要素を挙げ、おおむね適切に用語を用いてまとめている。
Ⅰ	想像したことや感じ取ったこととその理由について、どちらか一方しか記述していない。あるいは両方の記述があるが、理由に二つ以上の要素を挙げていない。(無記入を含む。)

表6 批評文イの判断基準

評価	
Ⅲ	一番気に入ったところや他者に紹介したいところについて、知覚・感受を伴った具体的な理由とともに明確に記述している。
Ⅱ	一番気に入ったところや他者に紹介したいところについて、知覚・感受を伴った理由とともに記述している。
Ⅰ	一番気に入ったところや他者に紹介したいところについて述べているが、理由について記入がない。又は、一番気に入ったところや他者に紹介したいところについて記入していない。

表7 批評文ア及びイのクロス集計

ア \ イ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	計(人)
Ⅲ	8	3	0	11
Ⅱ	22	37	1	60
Ⅰ	4	5	1	10
計(人)	34	45	2	81

### (3) 記述内容の変容

第一次の紹介文が評価Ⅰであった生徒のうち、第三次の批評文では評価Ⅱと判断した生徒の記述内容の変容を、表8、表9に示す。

表8 生徒Ⅰの変容

第一次	この曲はソナタ形式でできていて、動機が何度も何度もくりかえしてあります。動機は音色や速度をいろいろ変えて出てきます。提示部と再現部の第2主題には「隠れ動機」というものもあります。提示部と再現部にもわずかに違うところがあります。ぜひ「隠れ動機」と「提示部と展開部の違い」に耳をかたむけて聴いてみてください。
第三次	批評文ア 僕は、第1楽章と第3楽章は、強弱が激しくて、第2楽章と第4楽章は音色が明るい感じだなと思いました。それと、全楽章には共通点があるなと思いました。それは、リズムが速いということです。あと、音色がおだやかで落ち着いた部分があることです。
	批評文イ (私が一番気に入ったところは)第3楽章と第4楽章です。第3楽章は第1楽章の動機が変化しているところが好きでした。第4楽章は、とても明るくて、いいなと思いました。それと、第3楽章の一部が第4楽章に出てくるのもいいなと思いました。第3楽章と第4楽章が切れ目なく演奏されるところが、急に変わるのでおもしろいなと思いました。

生徒Ⅰは、第一次では知覚についての記述だけで、感受したことについては述べていない。また、この記述は、教科書の楽曲解説等を参考にしても書ける内容に留まっており、音楽を聴いて実感を伴って理解した内容とは言い難い。しかし、第三次では、音色について「明るい感じ」「おだやかで落ち着いた感じのある」などと感受を伴った表現をすることができた。また、自分にとってどのような価値があるかについても、「第3楽章と第4楽章が切れ目なく演奏されるところが、急に変わるのでおもしろい」と明確に記述することができている。途中、「リズムが速い」と表現するなど、用語の用い方は十分とはいえないが、評価Ⅱと判断できる文章である。

このような変容が見られた背景には、グループ活動の効果が考えられる。「動機が変化している」という内容は、グループごとに付箋を使っておすすめポイントをまとめる際、同じグループのメンバーと交流した内容である。このグループの付箋の記述を分析すると、生徒Ⅰは、動機について「高い」としか記述していなかったが、他者との交流から、動機のリズムが拡大されて現れることや、第1楽章の動機に比べて音の動きが一定であることに気付いたことが推測できる。このように、グループ活動を通して、音楽的な特徴を共有し、音で実際に聴き確かめたことによって、生徒Ⅰの音楽のよさや美しさを味わって聴く力が高まったといえる。

表9 生徒Ⅱの変容

第一次	第1楽章は、リズムがよく速度が速めの曲です。それに第2主題では、動機がかくれています。曲を聴きながらそれを探すと楽しいと思います。なので、ぜひ聴いてみてください。
第三次	批評文ア 第1楽章は、同じリズムが何度も繰り返される部分から、追いかけてられているような感じが思い浮かんだ。第2楽章は、時が流れるような落ち着いた音色から、場面の变化を感じ取った。第3楽章は、強弱の変化が多く、急いでいたり、ゆっくりになったり、動機の最後の音が違ったところから、時代の違いを感じた。(後略)
	批評文イ (私が一番気に入ったところは)第4楽章です。第4楽章は、第3楽章から切れ目なく演奏されるので、余韻を感じながら聴くことができたからです。それに明るい音色が続き、壮大な感じで終わっているため、ベートーヴェン自身の気持ちが明るくなったように感じたからです。ベートーヴェンの人生を表しているように感じ取れました。

生徒Ⅱも、第一次では、知覚についての記述に留まり、感受については述べられていない。また、「リズムがよい」という記述から、知覚も十分とはいえない。しかし、第三次では、「同じリズムが何度も繰り返される部分から、追いかけてられているような感

じが思い浮かんだ」と記述している。これは、リズムに関する記述が具体的にただでなく、知覚と感受を関わらせて音楽を捉えることができた姿であるといえる。批評文においても、授業で得た作曲者に対する知識を関わらせて音楽を捉えており、再構築した知識を基に、音楽を深く捉え直すことができた姿といえる。

以上のような生徒の変容から、本研究の指導事例を通して、生徒は音楽のよさや美しさを味わって聴く力を高めることができたと考える。

## VIII 効果的な指導の在り方

コミュニケーションする活動を充実させた鑑賞の指導について、中学校で効果的に実施する際のポイントを次のように整理する。

### ○個人思考の時間を確保する。

本事例では、ペアやグループにおける言葉によるコミュニケーションの前に、個人思考の時間を十分に確保し、あらかじめワークシートや付箋に個人の考えを書かせておいたことが、思考の深まりにつながった。

### ○目指す共感・共有の姿をイメージしておく。

本事例では、授業で目指す共感・共有の姿を具体的に示した。指導者が、他者との関わりを通して生徒に感じ取らせたいことや考えさせたいことを具体的にイメージし、授業の見直しをもっておくことが大切であると考えた。

### ○知覚・感受を支えとした学習展開を工夫する。

本事例では、グループ活動で音楽を流すタイミングを生徒の任意としていたため、グループによっては言葉によるコミュニケーションに傾いた状況もあった。鑑賞の際は、常に音や音楽で実感を伴って考えを発展させていくことが大切である。また、教室の音環境についても配慮が必要である。

### ○比較や焦点化により知覚・感受を促す。

本事例では、生徒の知覚・感受を促すために、「第1楽章と比べて」という比較の視点をもたせたり、楽曲を聴き取らせる際に、聴く視点を提示して聴かせたりする工夫が効果的であった。

## IX 研究のまとめ

### 1 研究の成果

一年次の研究を踏まえて検証授業を実施し、授業の分析を行った結果、本指導事例におけるコミュニケーションする活動の工夫については概ね有効であることが分かった。また、検証授業の分析を通して、

コミュニケーションする活動を充実させた中学校音楽科の鑑賞領域の指導の在り方についてポイントを整理することができた。

## 2 課題

本指導事例は5時間を要するものであり、年間授業時数が35時間（第2学年の場合）の中学校音楽科においては、事例のすべてを扱うことが難しいことも予想される。そのため、指導事例を抽出して扱う場合の整理が必要である。また、検証授業の生徒の様子から、鑑賞領域の指導においては、知覚と感受を結び付けて音楽を捉える指導と、それを言葉で表す指導を継続的に行っていく必要性を感じた。さらに、評価の指標についても、今後更なる研究を進める必要がある。

おわりに、本研究を進めるに当たり、御指導・御助言をいただいた、広島女学院大学人間生活学部の森保尚美准教授、また、研究協力校として授業実践等で御協力いただいた、北広島町立千代田中学校の基木雅貴教諭に心から感謝を申し上げる。

### 【注】

- (1) 大熊信彦(平成25年):「音楽教育における学力をどう捉えるか〜指導と評価の実践的な視点から120」『中等教育資料平成25年9月号』学事出版pp.60-61に詳しい。
- (2) 中央教育審議会(平成28年):「芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」pp.8-11に詳しい。
- (3) 津田正之(平成28年):「音楽の授業のさらなる充実 - 今後の動向を見据えて -」音鑑・冬の勉強会2016に詳しい。

### 【引用文献】

- 1) 白井学(平成27年):「生徒にとって意味のある音楽の授業実践に向けて(8) 音楽科・芸術科(音楽)の学習指導要領の要点(3)-①」『中等教育資料平成27年2月号』学事出版p.57
- 2) 文部科学省(平成20年a):『中学校学習指導要領』文部科学省p.76
- 3) 文部科学省(平成20年b):『中学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社p.51
- 4) 文部科学省(平成20年b):前掲書pp.17-18
- 5) 中央教育審議会(平成28年):「芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」p.7

### 【参考文献】

- 石井英真(2015):『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影—』日本標準